

# ジョン・ウェスレーの教育的遺産

## —青年のための教育—

大森 秀子

### はじめに

日本において青年という言葉を創案したのは小崎弘道であり、YMCA の Young Men の訳語として用いたのが始まりであるといわれている<sup>1</sup>。熊本洋学校で学んだ小崎が後に、外人教師ジェーンズから受洗し、熊本バンドに加わったことはあまりにも有名であるが、横浜バンドの植村正久や本多庸一、札幌バンドの内村鑑三や新渡戸稲造もそれぞれ青年学生の群れの中で宗教的人格を養った。その1世紀以上も前に、バンド・クラス・ソサイエティーという宗教組織において青年のキリスト教信仰とモラルある人格形成のために尽力したのが、英国のジョン・ウェスレーである。本稿では、ウェスレーが青年のための教育に参加するに至った歴史的背景とその実践的内容を考察し、我々はウェスレーからどのような教育的遺産を受け継ぐことができるのか、その現代的意義について述べてみたい。

### I. 教会教育におけるユース・グループ

#### A. 信仰訓練と宗教的ソサイエティー

いわゆる青年期へのまなざしが歴史的にどこから発生してきたのかを簡

---

<sup>1</sup> 奈良常五郎『日本YMCA史』、日本YMCA同盟、1959年、5頁

単に整理してみると、まず、教育思想史の上で、青年を発見したのはルソーである。ルソーは『エミール』（1762年）で青年期を、性に目覚める第二の誕生の時期として捉えると共に、情緒的不安定や反抗を経験する危機の時代として描いている。ルソーは青年の身体的精神的発達と文化的発達との間に乖離があることをみてとりながら、この世における二度生まれを認め、「一回目は存在するために、二回目は生きるために」教育が必要であると述べている<sup>2</sup>。

次に、社会史的アプローチをもって人生における青年期に着目したのは、フランスの社会史家のアリエスである。彼によれば、「かつての古い社会には、青年は存在しなかった。人びとは子どもからいきなり大人の社会に入ったのであり、大人の社会そのものが大部分、きわめて若い人びとからなっていたのである。中間的な年齢期というものはなかった。」しかし、ヨーロッパで子どもの学校への囲い込みが上流階級から中産階級へと広がり、学校教育が延長するのに伴って、徐々に青年は子どもと区別され、また、大人とも区別されるようになる。若者期から分化した青年期という新しい人生段階への関心から、20世紀に入ると、青年期の人間形成にふさわしい教育のあり方として、ボーイスカウト運動などが展開されてくる<sup>3</sup>。

第三に、キリスト教史的視点からみると、ヨーロッパ信仰共同体で宗教的ソサイエティーが発生すると共に、青年期にまなざしが向けられている。宗教改革以来、プロテスタント教会は人間の精神的な成長の中心に回心をおき、自己の内面を絶えず点検することを重視した。その中で回心した者が墮落せず、どのようにしたら真面目で正しい信仰を持ち続けることができるかを思い巡らし、その方途として、教会の内側に様々な宗教的ソサイエティーが形成された。そこではいわゆる青年が宗教教育の直接的な対象となり、信仰訓練を目的とする宗教的ソサイエティーが教会のユース・グループのルーツとなっている。初期の代表的なものは17世紀後半に英国に

---

<sup>2</sup> ルソー『エミール（中）』、今野一雄訳、岩波書店、1963年、5-7頁

<sup>3</sup> フィリップ・アリエス『＜教育＞の誕生』、中内敏夫・森田伸子編訳、新評論、1983年、241-249頁

移住してきた牧師ホーネックの宗教的ソサイエティーである。ホーネックは、ドイツ敬虔主義の「コレギア・ピエタティス」(敬虔なる集会)というシュペーナーのグループに通じていた。彼はシュペーナーのグループが霊的な信仰訓練を重視し、メンバーが規律ある精神生活を実践していたことに影響づけられ、ロンドンのハイチャーチ出身で堅信礼を受けた16歳以上の青年を対象に、1678年頃、セント・クレメント・デインズ・チャーチで集会を始めている。つまり、ホーネックは青年クリスチャンを適切に導くために、宗教的ソサイエティーをつくり、規則を定めたのである。(資料1)

その後、17世紀末のロンドンでウッドワードのポーラー・ソサイエティーが組織されている。このソサイエティーに毎週集まったのは、30歳以下の若い聖餐拝受者であった。いわゆる産業革命以前の前産業化社会までの青年は近代の産業社会の青年とは本質的に異なり、30歳代を含み、10歳代だけで構成されていない。ここで用いられる青年概念は adolescent ではなく youth に相当し、ウッドワードの宗教的ソサイエティーは年齢的に幅のある若者を対象にしたキリスト教青年組織であったといえる。(資料2)

ジョン・ウェスレーの父であるサムエル・ウェスレーもまた、ウッドワードに影響され、人々の宗教生活を改善するため、1701年2月7日にエップワースの牧師館で土曜日の夕刻、宗教的ソサイエティーを組織した。この時のメンバーは8人であったが、メンバーは12人を超えないこととし、30人40人と多くの人が入会を求める時には、2人のメンバーが新しいソサイエティーをスタートさせることとした。このソサイエティーのメンバーが青年を含んでいたかどうかは定かではない。一方、ウェスレーの母スザンナも、1711年から1712年の冬に、二人のデンマークのモラビア派の宣教師の話を読んで、深く宗教的に感動し、牧師館の台所で「拡大家族の祈り」の会を始めた。こうして、スザンナの宗教的ソサイエティーが形成され、婦人を含む200人を超える人が集まった<sup>4</sup>。このような両親の関与した宗教的ソサイエティーにジョンは影響づけられている。

---

<sup>4</sup> David Lowes Watson, *The Early Methodist Class Meeting: Its Origins and Significance*, Wipf and Stock Publishers, 1985, pp.72-73.

ウェスレーがオックスフォード大学時代、ホーリー・クラブに 1729 年から 1735 年までの 6 年間、関わったことはよく知られている。当クラブにウェスレーがいたのは、26 歳から 31 歳までだった。元々、このホーリー・クラブは 19 歳の弟チャールズが 1726 年に始めたものであり、ホーリー・クラブのメンバーはまさしく青年であった。最初のメンバーであるウィリアム・モーガンとフランシス・ゴアの正確な年齢は定かではないが、1730 年 2 月に参加したロバート・カーカムは 22 歳、ベンジャミン・イングハムは 18 歳であった。

ホーリー・クラブのメンバーは、真面目で規則正しい生活を送り、囚人、貧しい人、病人などを訪問し社会奉仕に尽力した。ホーリー・クラブでウェスレーが担った役割は、指導者としてのそれであり、メンバーが信仰の内側を点検するのに、ウェスレーはメディテーションを重視した。メディテーションの一つの目標は自分を知るという自己認識であり、自己吟味はそれを達成する主要な手段であった。自己吟味にあたって、ウェスレーらが採用した方法は、「一般的な質問リスト」に基づいて、自分の考え・言葉・行為への責任を毎日自己反省するという方法である。

たとえば、質問リストには「私は朝、その日のなすべき仕事を計画しただろうか。私はすべてのことに純真で冷静だっただろうか。私は怒ったり、そのように見えたりしなかつただろうか。私は 1 時間ごとに取り乱していなかつただろうか。」といったようなものがある。これらの質問によって毎日、自己反省することが促され、聖なる生活を実行したかどうかを自らに問うたのである。メンバーのイングハムは最初、数ヶ月間、週に一回、金曜日の夕方にこのような形でメディテーションをしていたが、1734 年 1 月には毎日反省するようになり、同じ年の 3 月には質問リストを日記に写し、それを一日の中で毎時間、反省の基礎として用いた。

さらに、ウェスレーの計画の中には週の各曜日に特別の美德を割り当て、その徳の下には質問のリストを置いて、それをもって自らを特別に自己内省するといった方法もあった。曜日毎の美德として、日曜日に神の愛、月曜日に人間愛、火曜日に謙虚、水曜日に節制と自己否定、木曜日に諦念と柔和、金曜日に節制と自己否定、土曜日に感謝を設定した。月曜日の人間愛に関す

る限り、日常的な隣人愛の実践を志向して、メンバーが信仰を内側だけでなく外側にも向けて、時間や富や賜物を用い、よきわざを示したことは想像に難くない。この方法の眼目は自らの罪を認め、それに対応する美德を自らの内に置くことにあり、決して規則を忠実に守ることや一定のよきわざを遂行することに第一義的な目的があったのではない。

ウェスレーが1768年に記した説教「良い管理人」をみると、自分のものと正式に呼べるものは何一つなく、神は魂・身体・財産・受けている才能のすべてを一人ひとりに託し、管理を任されたことが表されている。注目に値するのは、理解力・想像力・記憶力・意志・感情・愛と憎悪・喜びと悲しみ・願望と嫌悪・希望と恐れといった内面的な心の動きから、会話・体力・健康・好ましい人柄や好感の持てる物腰・学識・知識・他に及ぼす影響といったいわゆる教育の成果として身につけた人格までもが、神からその用い方を委ねられている点である<sup>5</sup>。神が「もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。」といわれた時は、この世で人が管理者であることを終える時であるが、ウェスレーの「キリスト者の完全」は、生涯における人間の発展可能性を前提とし、魂と心と身体を用いてその時にふさわしいクリスチャンの人間形成のあり方を示しているように思える。

## B. 宗教的養育とウェスレーの「バンド・クラス・ソサイエティー」

子どもの宗教的養育という流れの中でユース・グループの萌芽がみられるのは、ツィンツェンドルフのモラヴィア兄弟団のコミュニティにおける青年会である。ツィンツェンドルフはヘルンフルートの信仰共同体を年齢・姓・既婚未婚の別によって会（Choir）に分け、宗教的に成長するにふさわしい形態で教育を実践しようとした。会は具体的に嬰兒会、幼児会、年少少年会、年少少女会、年長少年会、年長少女会、青年会、乙女会、男子既婚者の会、女子既婚者の会に分けられている。各会の指導者はクワイアー・サーバントあるいはミニスターと呼ばれる年長の信徒に委ねられ、会のサイズに応じて

<sup>5</sup> 『ジョン・ウェスレー 説教53（下）』、勝間田充夫、河村従彦、藤本満訳、イムマヌエル総合伝道団教学局、1997年、439-460頁

援助者が任命された。青年会は 1728 年に組織され、1730 年には乙女会が形成された。

ところで、ツィンツェンドルフはどのように子どもや青年をみていたのだろうか。キンロックはツィンツェンドルフが、児童期を天真爛漫な時期、青年期を危機の時期とみなしたと指摘している。ヘルンフルトで子どもは少年イエスを友とし、青年はかつて青年であったイエスが人間的な不安や苦しみを経験されたことの意味を自らに問い、キリストを模範としてキリストの歩まれたように歩いていくことが望まれた。ツィンツェンドルフの青年会は、先にみたホーネックやウッドワードにおける青年組織と異なっている。つまり、英国の宗教的ソサイエティーでは回心した青年がいかに聖化された生活を保っていくかに力点が置かれているのに対して、ツィンツェンドルフの青年会は、情緒的に不安定な状態に陥りやすい青年に対して、宗教的成長に必要な養育の場として組織された。

その後、ウェスレーはペーター・ベラーの創設したフェーター・レイン・ソサイエティーに入会した、ちょうど 1 ヶ月後の 1738 年 6 月 13-19 日に、モラヴィア派のコミュニティに赴いている。ウェスレーは英国国教会の伝統であった宗教的ソサイエティーを、年齢・性別・結婚の別にバンドに分けて小グループに形成する意義を見出し、1738 年 12 月に「バンド・ソサイエティーの規則」を提案した（資料 3）。しかし、モラヴィア派のシステムの限界を感じ取ったウェスレーは、1740 年にフェーター・レイン・ソサイエティーを脱会した。1742 年にはロンドンのソサイエティーのメンバーが 1000 名を超えたのに伴い、メソジストの組織編成を思案した。1743 年 3 月 6 日にはソサイエティーが召集され、「合同メソジスト・ソサイエティーの性質・意図・一般規則」が読み上げられた。規則の内容をみると、ソサイエティーが 12 人一組のクラスに分けられ、各クラスにリーダーが配置され、1 週間に一度、集会を開くことが記されている。

1744 年には「バンド・ソサイエティーに与えられる方向」（資料 4）が提示され、聖日にももの売り買いをしないこと、お酒やたばこをのまないこと、借金をしないこと、装飾品をつけないことなど、注意深く悪を避けることが促されると共に、よきわざに励むことや、聖餐・みことば・祈り・断食など

の神の儀式に出席することが奨励された。これらの諸規則は日常生活にも及ぶ具体的で禁欲的なものであるが、決してお互いを裁きあうための律法主義的なものではなく、神の恵みに応答して責任をもって生きていくためのものであり、キリストの豊かさにまで成長することがその目的になっている。

藤本満氏によれば、ウェスレーはかつてホーリー・クラブを結成した時、ディシプリンという規律ではなく、アカウントビリティーという説明責任を導入した。つまり、メソジストは外側から枠にはめ込んで律する規律ではなく、むしろ自分が神の恵みに応答して、与えられた賜物を用いて自分の役割をどれくらい果たしているかを自らに問い、その説明責任を神の御前に差し出し、ホーリー・クラブにおいても互いに自らの説明責任を果たしていくことを追求したのである。

ウェスレーは終始アカウントビリティーの視点を失うことなく、バンド・クラス・ソサイエティーをアカウントビリティーの場として、クリスチャン青年のモラルある人間形成を願ったのである。その後、この組織を母体として、メソジストが外部の団体と結びつき、モラル・リフォーム運動を展開した。

ウェスレーの説教の中に、「慣習の改革」というのがある。この説教は「慣習改革協会」(The Society for the Reformation of Manners)で1763年に行なった説教である。最初、ロンドンの慣習改革協会は1691年に設立され<sup>6</sup>、ウッドワードの宗教的ソサイエティーと共通する会員を迎え入れながら、1690年代から1710年にかけて社会の悪徳を制するために、国家の法律や秩序の強化にエネルギーを注いだ。その主な活動は、市内の悪徳・不道德を防止するための情報提供・市当局への申し入れ、聖職者による説教後援、貧民子弟のための学校設立などであった。これらの働きからキリスト教知識普及協会(1699年)や海外福音伝道会(1701年)が生み出されている<sup>7</sup>。ロンドンには8つの慣習改革協会が存在したが、様々な理由から一度解散した。しかし、1757年に再結成され、モラル・リフォーム運動が再開されることになる。

<sup>6</sup> Paul Langford, *A Polite and Commercial People: England, 1727-1783*, Oxford University Press, 1989, p.128.

<sup>7</sup> Watson, *Ibid.*, p.71

ウェスレーはそれを次のように説明している。

「1757年8月のある聖日、少数の人々が祈りと信仰的な話をするために集まっていました。その席上で、聖日が甚だしくおおっぴらに俗化しつつあるという話が出ました。人々は聖日に売買し、露天を開き、居酒屋で飲み、街路や広場でたむろし、普通の日と同じように日常品を売っている。特にムーアフィールドズ (Moorfields) は、毎日曜日、町中がそういう人でごった返しているというのです。彼らは、こうした嘆かわしい状況を改善するために、どういう手段を講じるべきかを話し合いました。その中の6人が朝にジョン・フィールドディング卿を訪ねて意見を伺うことに、皆が同意しました。彼らはフィールドディング卿を訪ねました。彼は彼らの計画に賛同し、どのようにして実行に移すべきかを指示しました。彼らはまず、ロンドン市長と市議会、それにヒックス・ホールとウェストミンスター裁判官に対して請願書を送りました。すると、これらの行政側から計画を進めるように励ましを受けたのです。次に彼らは、その計画を高い地位にいる人々、そして国教会の聖職者たち、またロンドン・ウェストミンスター近郊の他教派の教会や集まりの牧師たちに明らかにすべきと判断しました。そして彼らはこれらの人々から心からの全面的な賛同を得ることができました。次に彼らは、自分たちの費用で指導のための本を数千部印刷し、地域の警官と公務員に配布し、いくつかの公務を説明し依頼しました。そして、実際の法律処分はまだ事が進展するのを未然に防ぐために、町のあらゆるところに安息日を破ることを警戒する文章と、それを禁じる法律の抜粋と、違反者に対する警告を掲示しました。こうした予備策によって道が整えられ、1758年のはじめ、聖日を汚している人々に関する通報が行政長官になされました……」<sup>8</sup>。

こうして、ウェスレーはモラルある社会を建設するために、メソジスト・ソサイエティーのメンバーがこの協会に入会し、同じ気持ちを有する人々と手を結び、何の見返りも求めず、運動を推進することを奨励した。ウェスレーは次のように書いている。

「慣習改革の協会に入会するために、特定の教派や党派に属している必要

---

<sup>8</sup> 『ジョン・ウェスレー 説教53(下)』、469-470頁



はありません。その人物が、調査の上きちんとした人であるとわかれば、だれでも喜んで入会が許されます。利己的な人、あるいはお金が目当ての人は長続きしません。会員になってももうかることはありませんし、かえって失うことになるからです。会員になるとすぐに、会費を求められます。会員のほとんどが『ホイットフィールド派だ』といううわさが立っていますが、それは大きな誤りです。忠実な会員の 20 名はホイットフィールド氏と関わりを持っていますが、50 名はウェスレーのソサイエティーに属し、また 20 名が、両者とは何の関わりもない英国国教会に属し、約 70 名の人が非国教徒です。全員で 160 名います。このほかに、折々の寄附をもって働きを助けている人がさらにいます」<sup>9</sup>。

さらに、ウェスレーはこの協会の会員を急いで増やすことを退け、会員の資格は財産や地位といった外的なものでなく、内的な資格だけであると述べ、「その人物が、自ら責められるところのない生活を送っているか、信仰・勇気・忍耐・堅実の人であるか、神と人とを愛しているか。そうであるなら、彼の入会によって会員数が増えるだけでなく、会の力が増すのです。……あなたがたは主のみわざに間に合う器となります」<sup>10</sup>と力説した。

つまり、ウェスレーにとって、メソジストの内的に裏づけられたモラルある人格こそ、公共的な場において、神の器として用いられる土台となるものであった。

## II. キリスト者の成長にふさわしい信仰養育と信仰訓練

### A. 儀式とユース・グループの意義

今から 3 年前、筆者はアメリカ・カリフォルニア州のロス市にある聖公会のセント・ジョンズ・エписコパル・チャーチを訪問した。この教会では、6 学年から 12 学年を対象とした「成人への旅プログラム (The Journey to Adulthood program)」を採用していた。このプログラムは、2 年間ずつの 3 つのセグメントから成り立っており、最初の 2 年間は「13 歳式 (Rite-13)」

---

<sup>9</sup> 同上、472-473 頁

<sup>10</sup> 同上、489 頁

といわれるプログラムになっている。これは 13 歳という思春期に入る複雑な年齢に着目したもので、元々、1990 年代の初め、ノースカロライナのダーラムのセント・フィリップス・エписコパル・チャーチで始まったものである。2005 年の時点ですでに 1300 以上のアメリカの教会に広がっており、雑誌 *Time* でも、スペシャル・レポート“Being 13”という記事で取り上げられ、諸教会は共通して、13 歳は深い信仰の時であることを強調した。セント・ジョンズ・エписコパル・チャーチの広報紙には、その年の 5 月に執り行われた 13 歳の儀式が次のように記されている。

「私たちの（アメリカ）社会では、子ども期と成人期の間の境界線はしばしばフアジーなあいまいなものとなっています。私たちには他の文化と違って、成人への道を歩んでゆくポイント地点を定める、形式化された通過儀礼がありません。私たちは青年に『あなたたちは前進し成長し学び、成人になりつつある』ということを伝える方法を必要としています。私たちがこのセント・ジョンズ教会で青年と共に用いる『成人への旅プログラム』が、まさにそれを実現しようとしています。5 月 22 日の日曜日午前 10 時の公同礼拝で、私たちは 10 代の数人と意義ある通過儀礼を行います。この礼拝式は『男性であることと女性であることの儀式（The Celebration of Manhood and Womanhood）』と正式にはよばれますが、バルミツバと同じように、その候補者の 13 歳の誕生日近くに執り行われることから、『13 歳式』としてよく知られています。その式の間、私たちは神様がそれぞれ一人ひとりにお与えになった女性とか男性の賜物を祝福するのです。これは私たちが働いて得ることのできない、また、証明したりする必要のない、惜しみなく与えられた賜物なのです。この賜物は私たちが誰であるかの本質となるものです。私たちが成人になっていく旅において成長し成熟するにつれて、私たちの知識と技術は増しますが、私たちが誰であるかについての驚きの中心は同じものなのです。以下の人々は、私たちが 5 月 22 日に祝福する 10 代の人々です……」<sup>11</sup>。

ここで述べられた 13 歳式は暦年齢を基準として設定され、13 歳を子ども

---

<sup>11</sup> St. John's Episcopal Church, *The Eagle*, May, 2005, p.9.

期と成人期の間にある青年期の入り口と捉え、通過儀礼として位置づけられている。日本の教会では、青年祝福式を執り行う教会もあるが、それは青年期の最終段階へ向かう通過儀礼とみることができる。文化人類学者のブックによれば、通過儀礼は分離、移行、統合の3段階から構成され、子どもがその地位から大人の地位へ進む時、現在の子どもの位置から次の大人の位置へそのまま直行することはできない。まず、現在の位置から物理的にまたは象徴的に切り離され、それから過渡的な状態へと移行して、その後、別の位置に到達統合される。キリスト教神学及びその儀式では、死と再生という象徴的な設定が重要な役割を演じる<sup>12</sup>。

筆者がインタビューしたウェンディー・クリフというファミリー・ミニストリー・コーディネーターは13歳の儀式を受けた青年の集会について、次のように話した。それによれば、彼らは毎月第一・第三聖日の午後6時に牧師、ファミリー・ミニストリー・コーディネーター、成人指導者と一緒にユース・フェロウシップで時を過ごし、特に、第一聖日にはその家族も参加する。

およそどの教会でも現在のユース・フェロウシップは教会の下の単位 subunit として構成され、日曜の朝、夕、ウイーク・デイのグループ活動を含みながら、礼拝、研究、交わり、奉仕をそのプログラム内容としている<sup>13</sup>。すでにみたように、ウェスレーのバンド・クラスは17世紀から18世紀に回心者の信仰訓練の場として考え出された青年のための宗教的ソサイエティとツインツェンドルフの信仰養育のための青年会の二つの流れをくむものであった。ユース・グループの活動を考える上で重要な点は、教会で青年のために執行される儀式とユース・グループのプログラムを信仰養育と信仰訓練の観点から整合性をもって位置づけることである。そして、教会は教会のユース・グループによる社会奉仕を通してキリスト教に根ざしたモラルを青年の中に形成し、公共的な使命を果たしていくことが期待される。そのグ

<sup>12</sup> フィリップ・K・ブック『現代文化人類学入門(一)』、江淵一公訳、講談社、1977年、180-182頁

<sup>13</sup> 高崎毅『基督教教育』、新教出版社、1957年、48頁

ループの指導者にはよきクリスチャンモデルが、できるだけ青年に近い、青年の感受性を理解できる牧師や伝道師、大人が望まれる。

## B. 悔い改め・信仰義認・聖化と「キリスト者の完全」

ランジスは現代の人生周期における青年—若者期を、12歳頃から24歳頃までとしている<sup>14</sup>。青年期は10歳~12歳頃から身体的・生理的に変化する第二次性徴があらわれ、感情面では多情多感で、疾風怒涛という語に象徴されるように、自己に対しても社会に対してもアンビバレントな葛藤感情を有する時期である。青年が精神的に自立していく上で大事なことは「自分が何者であるのか」、また、「自分はどこへ向かおうとしているのか」を知ることである。

エリクソンは「人生の指針となる世界観=価値観は青年期を終えた後に形成される」としている。彼はその書『青年ルター』で、ルターが修道院時代に自分探しをし、聖歌隊で発作した青年期の出来事について、次のように描いている。

「修道院に入る直前のマルチンの気分は、聖歌隊における発作の時期に再び陥った気分でもあったが、おおよそ憂愁の状態(a state of tristitia)と彼自身考えていたし、他の人からもそう思われていた。あの落雷の前、彼は急激に深いメランコリックな無気力感に閉ざされ、父親が望んでいたような勉学の継続も結婚も考えることができなくなっていた。そして、落雷の時、その不安は計り知れないものになった。……彼がその当時、生活空間全体が締めつけられるように感じ、そこから外に出るには、ただひとつの道しか残されていないと感じていたことを物語っている。むろん、その残されたひとつの道とは、過去のすべての生活と俗世で生きる未来を放棄して、新しい生活に没頭することであった。ところが、彼はこの新しい人生を、まさに『まわりをすべて囲まれた』制度の中に求めた。……彼はしばしの安らぎを得て、『信心深い者』になった。しかし、発作が起こった頃には、その悲しみ(sadness)は再び深刻になってしまったのである。……青年という時期は、少なくとも『一度生まれの人』について見れば、人生の中で最も生き生きした、無鉄砲な、自信にみちた、最も自己意識的でなく生産的な時期である。ウィリアム・ジェイムズはこの『一度生まれ』という言葉をカーディナル・ニューマンか

---

<sup>14</sup> パウル・H・ランジス『青年社会心理学—少年少女の成熟の過程—』、鴻永重次訳、十字屋書店、1953年、9頁

ら借り受け、苦しむことなくその時代の世界観＝価値観に自らすすんで適合し、逆に適合させられてゆく、過去や未来に関する思想と現在のテクノロジーが要請する日常的な仕事との間に矛盾を感じなくてすむような人のことを表現するために使った。ジェイムズは、『一度生まれ』を『病める魂』から区別した。『病める魂は』、第二の誕生を求める『分裂した自己』であり、『人格的生命力の中心にあるもの』を『回心させる』ような『成長の危機』を含んでいる<sup>15</sup>。

ここで、エリクソンはウィリアム・ジェイムズの考えに従って、病める魂には二度生まれがあるとし、しかも、病める魂は世界観・価値観を模索しているのが特徴で、自分がその時、選び取ったある一定の既存の価値に献身しながら、自分探しをすると述べている。しかし、自分探しのプロセスはスムーズではなく、価値観の転倒があり、そこから新しく再生された自分を確立していく第二の誕生があることを暗示している。

このような自分探しをしている青年の病める魂に対して、ウェスレーの神学は実に示唆に富んでいる。ウェスレーはキリスト教の基本的な教義を「悔い改め・信仰義認・聖化」の三つにおいて捉え、それぞれを「宗教の玄関・宗教のドア・宗教そのもの」とした。ここにはまず、宗教の玄関で原罪をもって生れた人間の悔い改めがある。次の宗教のドアは救いの門に相当し、信仰によって義とされる。「正しき真なるキリスト教信仰とは、聖書や信仰簡条が真実であることを信じるだけでなく、キリストを通して永劫の罰から救われているという確かな信頼を得ることである。」そして、中に招きいれた人間は潔められた者として、その潔さを保ち続けていくところにキリスト者の本来的な姿がある。それをウェスレーは、「心を尽くして神を愛し、自分を愛するように隣人を愛し、その愛においてあらゆる悪いものから遠ざかり、あらゆる人にできる限りのよきわざを行うこと」であるという<sup>16</sup>。しかし、キリスト者の人生の歩みは不均衡の破れを内包しており、転落の危険性が常につきまといっている。それにもかかわらず、聖霊の助けによって完全

<sup>15</sup> E・H・エリクソン『青年ルター1』西平直訳、みすず書房、2002年、54-57頁

<sup>16</sup> John Wesley, "The Principles of a Methodist Farther Explained" (1746), *The Works of John Wesley*, Vol.9, Abingdon Press, 1989, pp.227-229.

から完全へと成長するのがキリスト者の完全である。そこで描かれるクリスチャン青年の成長の軌跡は、点と点を結んでできる上昇の線であるといえる。

## 資料

### 資料 1

ホーネックの宗教的ソサイエティー統制のための規則（1678年）

1. ソサイエティーに入会するすべての人は聖なる真面目な生活を送るよう決心すべし。
2. 16歳になり、まず主教から堅信礼を受け、厳かにバプテスマの誓いをなすまでソサイエティーに入会すべきではない。
3. メンバーは自分たちを指導する英国国教会の牧師を選ぶべし。
4. メンバーは集会で神学の論争点を論議してはならない。
5. メンバーは教会とか国家の政治を論議してはならない。
6. 集会で連祷（Litany）や特祷（Collects）やその他の規定された祈りなどの（英国国）教会以外の祈りを使用してはならない。しかしそれでもなお、赦免といったような、牧師に特別に委ねられたいかなるものも使用してはならない。
7. メンバーによって選ばれた牧師は、これらの集会でいかなる実践神学が読まれるべきかを指導すべし。
8. メンバーは祈りや朗読の後、自由に讃美歌を歌ってよい。
9. すべて終わった後、残された時間があれば、霊的な関心事についてお互い論議してもよい。しかし、これは出席を義務づけられる、固定した宗教行事になってはならない。

10. この集会は主の日に置くことはできないので、週の一日が指定されねばならない。何の理由もなしに欠席する人は3ペンスを箱の中に入れなければならない。
11. メンバーが会う時はいつでも、皆6ペンスを箱にいれなければならない。
12. 1年のある日に、すなわちイースター後の第7日曜日（聖霊降臨祭の）の2日後の火曜日に、二人の執事が選ばれ、節度のある晩餐が用意され、説教がなされ、お金が（必要なチャージを控除して）貧しい人に分配されるべきである。
13. これらの規則の記された本が購入されるべし。
14. このソサイエティーを取り仕切る牧師の同意なしに、誰もソサイエティーに入会すべきではない。見習いの人はメンバーに選ばれるべきではない。
15. 良心の覚醒があれば、牧師の前に連れて行かれるべきである。
16. いかなるメンバーもそのソサイエティーを脱会するのが適当であると判断される場合には、貯えのために5シリングを支払うべし。
17. ソサイエティーの主要な部分は、以下にまとめられる。
18. 次の規則はこのソサイエティーのメンバーにより特別に奨励される。すなわち、お互いに愛すること、罵られるとき、罵り返さないこと、どの人の悪もしやべらないこと、人を中傷しないこと、できれば1日に7回、祈ること、英国国教会に繋がっていること、あらゆることを平和に優しく取り扱うこと、お互いに助け合うこと、集会に出入りする際に聖なる思いに自らを満たすこと、毎夜、自己吟味すること、人を公平に扱うこと、目上の人に靈的にもこの世的にも従うこと。

David Francis Holsclaw, "The Demise of Disciplined Christian Fellowship: The Methodist Class Meeting in Nineteenth-Century America," Dissertation (University of California), 1979, Appendix A, 210-211.

## 資料2

### ジョサイア・ウッドワードのソサイエティーの規則例（1712年）

1. このソサイエティーの唯一の目的は心と生活の実際的な聖化を促進することである。それはこのソサイエティーに入会する人が神の恵みによってこれらの祝福された諸目的を成就するのにふさわしい、あらゆる手段に傾注することを真面目に決心することが絶対的に必要である。  
……
2. この目的において魂と精神を有する存在となるために、当ソサイエティーのメンバーは皆、英国国教会に属し、同教会の礼拝式やその他の公同礼拝に頻繁に出席し、自らを証しすべきである。……
3. このソサイエティーのメンバーは実践的聖化に向かっていくような主題について話し合い、自らの規律を聖書に置き、神の恵みと祝福を求めて神に祈ることによってお互いに実践的聖化に励むために週に一回夕刻に共に会うべきである。……
4. このような集会ではメンバーは論争中の問題点に議論がすべて流れていたり、国家の事柄とか、商売やこの世的な内容に不必要な談話が及んだりする。しかし、談話で心傾けるべきことは、神の栄光であり、お互いに愛において啓発することである。
5. 毎週、集会では金銭の敬虔な慈善的な使用目的、特に貧しい子どもを学校へ送るための公費を蓄えることに対して、どの人も何が適切なことかを考え、思いめぐらすよう委ねられる。こうして集められたお金はソサイエティーの二人の執事によって保管される。この執事は1年に一回、あるいは数回、投票によって選ばれる。……
6. どのメンバーも慈善の目的を執事に進言し、(他のメンバーの同意をもって)執事は特別な必要に従って、共通の蓄えからその人に与えること。  
……
7. (執事に納得した話をしないで) 四回集会に欠席した人はどの人も、そのソサイエティーに離反した人としてみなされるべきである。
8. ソサイエティーの全体に通じている執事に正当に承認を得ることなしに、



誰もそのソサイエティーに認められるべきではない。……

9. これによってこのソサイエティーに関わるどの人も、ゲームの危険なわなや、居酒屋で利用されるゲームに関わるというあからさまな醜聞について思いをめぐらすよう奨励される。……
10. 次の義務は我々の聖なる宗教のスキャンダルと非難を退けるものであるが故に、メンバーは神の恵みによって真面目に努力することを決心すること。
  - 1) あらゆる取引に公正であること、みせかせの几帳面さに対しても。
  - 2) 霊的なことやこの世のことの両方に対して、神に絶えず委ねながら、毎日何回も祈ること。
  - 3) 理にかなった障害によって妨げられない限り、少なくとも月に一回、主の聖餐にあずかること。
  - 4) きわめて柔和で謙遜であること。
  - 5) 非難している他人に対して用心すること。
  - 6) あらゆる場で聖なる思いに慣れ親しむこと。
  - 7) お互いに助け合うこと。
  - 8) 誰に対しても忍耐と憐みをもって接すること。
  - 9) 聖書や良書を読む時、また、説教を聴く時、自らを反省すること。
  - 10) 悪いつきあい、広まっている誘惑などを避けるのと同様、あらゆる予見される悪の誘因を避けること。
  - 11) 我々が急いで向かいつつある、変えることのできない永遠の世界で栄光に包まれるか、あるいは永劫の罰を受けるか、それぞれの異なる状態について、しばしば考えること。
  - 12) 毎夜、その日にどんなよいことや悪いことをしたかを自己吟味すること。
  - 13) もし融通がきけば、(特に主の聖餐近くに) 1ヶ月に一度、個人で断食をするか、都合のよい時に数回の食事から断食をすること。
  - 14) 情愛や欲を持つ肉を抑制すること。
  - 15) 天国のような心やあらゆる恵みに満たされて前進すること。
  - 16) ののしり、怒り、気むずかしさ、矛盾に我慢できないことなど

を避けるのと同様、靈的自負や靈的ぶることを避けること。

- 17) 個人で祈る時、ソサイエティー全体を覚え、祈ること。
- 18) 涵養のためにしばしば敬虔な本を読むこと、特に聖書を。
- 19) この宗教を特別に告白するという大きな義務を絶えず心に留めること。誰もメンバーに表れるものによって、宗教から守られたりくじかれたりしないように用心すること。宗教を非難しながら話す機会はどの人にも与えられてはならない。
- 20) あらゆる種類の気どりや不機嫌を避け、どの人にも親切で、丁寧に礼儀正しい態度をとること。……

*Ibid.*, Appendix B, 212-214.

### 資料3

バンド・ソサイエティーの規則（1738年12月25日作成）

1. 少なくとも週に一度会うこと。
2. 必ず約束した時間を厳守して出席すること。
3. (出席者は)時間通りに讚美や祈りを持って始めること。
4. 最後の集会の後、我々が思いと言葉と行いにおいて犯した過ちや、我々の感じた誘惑と一緒に、魂の本当の状態についてそれぞれ順番に自由に率直に話すこと。
5. 出席者のどの状態にもふさわしい祈りをもって各集会を閉じること。
6. 我々の中で誰か率先して自分の状態を話すよう求め、それから他の人に、自分の状態・罪・誘惑に関してできるだけ多く深くみつめる質問を、順番にしていくよう求めること。

我々の中で最初に話す人が特定される前に、どの人にも幾つかの質問が投げかけられ、同じ趣旨でなされる。

- 1) あなたは罪が赦されていますか。
- 2) 我らの主イエス・キリストを通して神との平安を保っていますか。

- 3) あなたは精神を尽くして神を証していますか。つまり、あなたは神の子どもですか。
- 4) 神の愛はあなたの心に広く注がれていますか。
- 5) 罪は内的に外的にあなたを支配していませんか。
- 6) あなたはあなたの過ちについて他の人から聞きたいですか。
- 7) あなたはあなたのすべての過ちについて、率直かつ徹底的に聞きたいですか。
- 8) あなたのことにについて我々一人ひとりの心の中にあるすべてを、時々、知りたいですか。
- 9) 考えてください。あなたについて我々が考え、心配し、聞くすべてのことを、知りたいですか。
- 10) このことをなす上で、我々が徹頭徹尾突き進み、できる限り近づいて、あなたの心の奥底まで深く関わってほしいですか。
- 11) こうした機会や別のすべての機会において、全くオープンに例外なく、偽りなく、制限なしに、あなたは自分の心の中を全部話したいですか。また、それはあなたの意図するところですか。

上述の質問はどれも状況に応じて、頻繁に尋ねられてよい。また、どの集会でも次の5つが質問されてよい。

1. われわれが最後に会ってから、どんな罪を犯しましたか。
2. あなたはどんな誘惑に出会いましたか。
3. あなたはいかに救い出されましたか。
4. 罪であろうとなかろうと、あなたが疑っていることでどんなことを考え、また、何を口にし、どんな行動をしましたか。
5. あなたには秘密にしておきたいことはありませんか

John Wesley, *The Works of John Wesley*, Vol.9, Abingdon Press, 1989, pp.77-78.

## 資料4

バンド・ソサイエティーに与えられる方向(1744年12月25日)

- I. 注意深く悪を避けること。特に、
  1. 主の日にもものを買ったり売ったりしないこと。
  2. 医者に処方されない限り、多量のアルコールを含むお酒やいかなる種類のお酒も一滴も飲まないこと。
  3. 売り買いは共にすぐになされること。
  4. いのちをかけないで何も誓わないこと。
  5. 陰で誰の非難もしないこと。思慮なしに、陰口をたたく人を止めさせなさい。
  6. 指輪・イヤリング・ネックレス・レース・ひだ飾りといったような必要のない装飾を身につけないこと。
  7. 医者に処方されない限り、かぎたばこ・たばこを吸うといったような自己道楽をしないこと。
- II. ひたすらよきわざに励むこと。特に、
  1. あなたが持っているものの中から、あなたの力のあらん限り施しをすること。
  2. あなたの判断と愛と知恵の従順において、すべての罪を戒めること。
  3. 勤勉と儉約、自己否定を旨とし、毎日、十字架を取りなさい。
- III. 絶えずあらゆる神の儀式に出席すること。特に、
  1. 毎週、教会で主の聖餐を受けること。そして、公のバンドの集会に毎回出席すること。
  2. 距離・仕事・病気が妨げない限り、毎朝、みことばにきき養われること。
  3. 毎朝、個人で祈りを捧げること。そして、もしあなたが家族の長であるなら、家族の祈りを捧げること。

4. いつも空いた時間には聖書を読み、そこで瞑想すること。
5. 1年のすべての金曜日を断食とか禁酒の日として遵守すること。

*Ibid.*, p.79.

[付記]

本稿は、日本ウェスレー・メソジスト学会研究会（2008年9月8日開催）において、拙稿「宗教的青年組織における道徳的人間形成」（青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『モラル教育の再構築を目指して——モラルの危機とキリスト教』[教文館、2008年]）に基づいて行った講演部分をまとめたものである。

（青山学院大学・文学部教育学科教授）